

派遣者番号	R3K19	氏名	山口 瞳
研究主題 —副主題—	若手教員の授業力向上研修について —高等学校における授業省察と事後協議会の在り方—		
派遣先	東京学芸大学 教職大学院	担当教官	伊藤 良子
所属	都立一橋高等学校	所属長	樋口 博文

キーワード：若手教員 授業力向上研修 授業省察 リフレクション ALACTモデル 事後協議会

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

本研究では、高等学校における若手教員（任用後1～3年目）の授業力向上を目指し、意欲と省察力を高める研修の在り方について、効果と課題を探ることを目的とする。

2015年12月、中央教育審議会「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について（答申）」において、教員の資質能力の向上を最重要課題と位置付けるとともに、「教員の経験年数の均衡が顕著に崩れ始め、かつてのように先輩教員から若手教員への知識・技術の伝承をうまく図ることができない状況がある」ことを指摘した。任用初年度から授業を担当する若手教員の授業力向上を図るため、教育実践の土台となる専門的な知識や具体的な教育技術の習得に加え、日々の実践を振り返る省察力の向上を目指す研修の充実が喫緊の課題となっている。

省察力の向上については、以下のような課題が挙げられる。①省察時に、授業者は自己の欠けたところへ目を向けがちであり、次の行動を起こす意欲を失うことがあること、②一般に省察の内容が深められておらず、得られる気付きや改善策が表面的なものにとどまること、③研究授業後の事後協議会の内容が参観者の経験による一方的な助言や講評に終始し、表面的な代替案探しにのみ時間を費やすケースが見られること、④中学校や高等学校では、教科の指導技術を中心とした授業研究により、他教科の教員の参加が難しくなり、小規模校や、もともと教科を担当する教員数が少ない芸術科や家庭科、情報科などでは多様な意見を聞く場を得にくいこと、などである。

2 研究の方法

(1) 研究協力者

研究協力者は、都立高等学校の若手教員A（家庭科）及び若手教員B（数学科）である。

(2) 研究の流れ

省察力向上を目指して構造化した研修の流れ（図1）に基づいて研修を実施し、音声記録を分析した。若手教員Aは家庭総合の授業省察を計8回、若手教員Bは数学I及び数学Aの授業省察を計4回実施した。

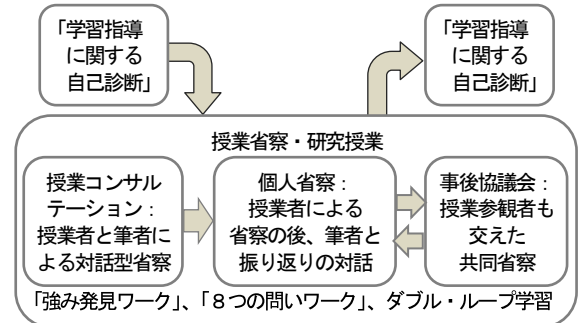


図1 省察力向上を目指して構造化した研修の流れ

(3) 研修の内容

ア 「学習指導に関する自己診断」

東京都教職員研修センター（2021）の診断項目を用いた。

イ 「強み発見ワーク」

研修開始時に、授業者がもつ強み（コア・クオリティ）に着目して言語化した。

ウ 「8つの問いワーク」

授業省察時に、F. コルトハーヘンが理想的な省察プロセスとして示すALACT（アラクト）モデル（図2）に基づき、第三局面の「本質的な諸相への気づき」を得るための「具体化のための質問」として、「8つの問い」（表1）のワークを活用した。

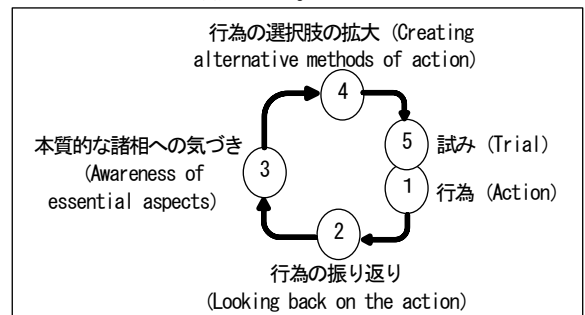


図2 ALACTモデル

表1 「8つの問い」

0. 文脈はどのようなものでしたか？	
1. あなたは何をしたかったのですか？	5. 生徒たちは何を思ったのですか？
2. あなたは何をしたのですか？	6. 生徒たちは何を思ったのですか？
3. あなたは何を考えていたのですか？	7. 生徒たちは何を考えていたのですか？
4. あなたはどのように感じたのですか？	8. 生徒たちはどのように感じたのですか？

エ 事後協議会

授業者ファーストの構成にするとともに、授業者以外の教員に対する働き掛けを意識した。「強み発見ワーク」及び「8つの問いワーク」を行った後、授業者に生じた問いについて少人数グループに分かれて協議を行い、全体発表で成果を共有した。協議会終了後には、協議の流れや成果物を職員室内に掲示し、協議会に参加できなかった教員に対しても成果の共有を図った。

オ ダブル・ループ学習

行動の結果から行動の基準を振り返るシングル・ループ学習に加え、背景のより深い理解を経て行動の基準に対する振り返りを行った。

3 研究の結果

(1) 「学習指導に関する自己診断」の変化

若手教員Aは、授業の振り返りを行う方法が身に付き、「8つの問いワーク」を活用することで授業者としてどのような授業を目指しているかを再認識し授業改善につなげていた。その結果、「授業の改善」及び「実践的な指導技術」の項目で、自己評価が向上した。若手教員Bは、生徒視点で授業を掘り下げ、計画とねらい・展開に生かせるようになった。その結果、「学習指導の計画」、「ねらいと展開」の項目で自己評価が向上した。

(2) 「強み発見ワーク」の効果

- ア 新たな自分の強みに気付くことができる。
- イ 肯定的な感情が表出される。
- ウ 前向きな行動を起こす意欲が喚起される。
- エ 事後協議会で、授業者の強みを生かす視点の検討につながる。
- オ 授業者以外の協議会参加者に対しても、授業改善意欲の向上が期待できる。

(3) 「8つの問いワーク」の効果

- ア 授業内容を細分化し、行動だけではなくその背景にある考え、感情、望みなどを意識化することにより、より深く内容を検討できる。
- イ 項目分けがなされていることで、生徒と授業者という視点から授業検討を深められる。

(4) 「8つの問いワーク」による省察内容の変化

若手教員Aは、同一内容の授業を省察するたびに、授業の手だてや技術的な方略という観点から、より本質的な授業の目標へと観点が移行する傾向が見られた。若手教員Bは、授業目標に関する省察内容は一貫しており、その目標を達成するために新たな授業方略を工夫する傾向が見られた。

(5) 本手法による事後協議会の効果

- ア 授業者自身が課題と感じた内容を扱える。
- イ 協議会に前向きで肯定的な雰囲気が醸成される。
- ウ 生徒視点での検討が行える。
- エ 他教科の教員から意見を得ることができる。

(6) ダブル・ループ学習の効果

- ア 授業省察の在り方について振り返ることで、

自己の変容を意識化して授業省察の効果を実感できる。

イ 他者の支援及び時間の確保が必要であるといった、手法の課題に気付くことができる。

ウ 自己の変容を客観的に捉えることで、自己に対するメタ認知の獲得につながる。

4 研究の考察

(1) 研究の成果

第一に、授業者の「強み発見ワーク」は、授業者が自己肯定的に振り返りを行う上で有効であることが確認できた。

第二に、「8つの問いワーク」を活用することで、授業者は授業のねらいをより明確にすることができ、省察力を向上させる一助となることが明らかになった。また、ダブル・ループ学習を取り入れながら、授業コンサルテーション、個人省察、事後協議会（共同省察）を構造的に実施することで、授業者が自らの変容を自覚できることが示唆された。

以上の二つのワークを取り入れることにより、他教科の教員も参加しやすい事後協議会を実施できることが分かった。なお、事後協議会の実施に当たっては、授業者ファーストを掲げ、授業者から発信される授業改善のための問いを主題にすることで、授業者の満足度を高めることが分かった。

(2) 今後の課題

第一に、効果測定方法の客観性を高めること及び協力者を増やして検証することである。

第二に、本研究で向上が見られた若手教員の意欲及び省察力について持続性を検証することである。教員は、学び続けることで質の高い教育を提供するために、意欲と省察力を持続させる必要がある。本研究によるアプローチがそれらを促進する効果を有するかについて、さらなる検証が必要である。

第三は、本研究の取組が研究協力者である若手教員以外に及ぼす効果の検証である。特に事後協議会において、授業者だけでなく参加者からも気付きや成長、同僚性の向上につながる効果の指摘が複数あった。本研究のアプローチが校内研修にもたらす効果についても、今後明らかにしていく。

5 今後の展望

本研究で明らかになった知見を、校内や校外における研修会等で活用・発信することで、若手教員を中心として授業力向上研修の充実を図る。また、校内研修や校内授業研究を活性化させることで、人材育成・学校組織マネジメントに結び付けていく。